
危機意識を研ぎ澄まし大災害を生き残る(2)

(矢作征三、巨大災害に立ち向かうニッポン、東京、社会評論社、2015、p.50-62)

2017年6月2日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

東日本大震災の際、多くの人々が津波により亡くなった。被災地である三陸地方では、1960年チリ大地震の際に津波を経験したり、宮城県沖大地震の発生が以前から注意喚起されていたりと、津波の危険性を意識する機会があった。また、3月9日にM7.3の大きな地震が起こり、3月11日当日に40分間に4度の巨大地震が起こるといふ異常事態に遭遇したにもかかわらず、多くの人々はすぐに高台へ避難する行動をとらなかった。

この論文では、巨大自然災害に直面した際に、多くの人々が危険を察知し行動に移せないという問題について考察したものである。

考察(1) 消防団員について

東日本大震災の際、消防署員や警察官に比べ消防団員が多く殉職した。地域の人々の安全のために自己犠牲の行動をとれる消防団員がいることは、災害時非常に心強いことであると思うが、この消防団員の自己犠牲の行動に頼っている現状があるのは問題である。災害時の安全は消防署員や警察官、消防団員によって守られるのではなく、1人1人がどういう行動をとったらよいのか考え、実際に行動することで自ら守っていくべきものである。そうすることができれば、普段はごく普通の人である消防団員の人たちも自分や家族の命を守ることができる。

考察(2) 日本社会の特性について

この論文中では、日本の社会的価値観も、災害時に積極的に動かない理由として挙げられている。和を重んじる、人前で恥をかかないように振る舞うなどの価値観が、個人個人が独自に自分の危険の程度を判断して行動に移すという姿勢が根付く妨げになっていると考えられる。日本の和を重んじる価値観をすべて変える必要はないと思うが、こういう価値観がある以上、災害時などに自分で判断し行動する力を欧米諸国以上に学んでいく必要があると考えられる。そして、この価値観に常にとらわれてしまうのではなく、個人個人の判断を大事にする、個人尊重の考え方も理解していく必要がある。

考察(3) 防災教育について

釜石市には小中学生が約3000人居た。大津波が襲ってきたときは、登校時であったが、登校していた子供たちの全員が無事であることが確認され「釜石の奇跡」と呼ばれた。その背景にはそれまで8年間受けてきた防災教育があったと考えられる。

① 想定にとらわれるな、②最善を尽くせ、③率先避難者たれ という避難3原則を掲げた防災教育の結果、釜石市の子供たち自主的に避難することができている。特に③の率先避難者というのは、1番初めに逃げられる勇気ある人のことであり、災害時にとても重要な能力である。

一方、石巻市大川小学校では、子どもたちは校庭で点呼を取ったにもかかわらず、その後の判断を下すことができず校庭に留まったままであったため、多くの生徒が津波の濁流に飲み込まれ命を落としてしまった。このように、防災訓練による危機意識の植え付けと適切な判断を下す訓練ができておるかどうかで、重大な結果につながるので防災教育は徹底して行うべきである。